

社会学における認識論的問題

——整理と検討——

宮 本 孝 二

はじめに

- 1 主観主義と客観主義
- 2 方法論と基礎的存在論
- 3 知識の存在様式

おわりに

は じ め に

ここで認識論というのは、社会現象の認識の過程に関する議論全般のことであり、認識の過程とは、認識対象である社会現象についてのデータの収集から、その分析、分析の結果獲得される認識成果に至る全過程のことである。なぜ、認識論を問うのか。社会学における認識論的問題の問題圏の地図を明確にする必要があるからだ。多様な問題が相互にいかに接合しているのか、あるいは接合していないのかを明確にし、また、それぞれの問題の解決の方向性を明示することによって、認識論にかかわる議論の混乱を解消することが目指される。

まず第1章において、認識論の議論においてしばしば登場する主観主義と客観主義の対立の意味を明確にすることから出発する。認識論的立場は主観主義と客観主義に二分して把握されることが多いが、認識過程のいくつかの異なった局面において、主観主義と客観主義の区分が成立する。すなわち、両者の対立項目が認識過程に対応して、大きく3つのカテゴリーに区分され

るのである。それを本稿では、方法論、基礎的存在論、知識の存在様式に関する議論とよぶことにしたい。

それを明示した上で第2章では、まず方法論について実証主義をめぐる議論を整理し、主観主義と客観主義の対立の無意味さを明らかにし、次に、基礎的存在論のレベルにおける主観主義と客観主義の対立を止揚する道筋を示す。社会現象の認識はいかなるものも前提的認識ともいうべきものの作用を受けるが、その基盤には社会的現実についての基本的な枠組があり、それを社会学的に精練して成立するのが基礎的存在論である。社会学におけるいわゆる理論的な議論は、実のところこの基礎的存在論に関するものなのであり、またそれは同時に、社会学原論とは何か、という問に答えることでもある。

第3章では、まず認識成果の真理性にかかわる問題を検討する。すなわち、客観的真理は成立しうるかという問題に焦点を合わせて、認識成果である知識の存在様式についての議論を整理する。知識の存在様式の特徴が、客観的真理の存立基盤を不安定なものとしていることが示されるが、同時に相対主義克服の道も探られる。さらに、社会学的知識の存在様式が現在直面している問題についても指摘し検討したい。

1 主観主義と客観主義

主観主義と客観主義の区分はいくつかの意味内容を含んでいる。いくつか挙げてみよう。

反実証主義と実証主義、意味理解と因果説明、内在的認識と外在的認識、意味（主観的意味連関）と機能（外在的意味連関）、社会唯名論と社会実在論、主意主義と決定論、行為中心主義と構造中心主義、意味の形成・創造と意味規則の構造、批判的認識と価値中立的認識、主観的真理（相対主義）と客観的真理、個性記述的科学と法則定立的科学などが直ちに挙げられる。

認識論的問題を議論する際には、これらの対立項目の各々と全体をどう把握するかが重要になるが、必ずしもそれが自覚されてきたとはいえない。本

章では、これらの項目が前述の3つのカテゴリーに大きく区分されることを主張する。反実証主義と実証主義、意味理解と因果説明、内在的認識と外在的認識などは、社会現象からのデータ収集とその分析のありかたに直接にかかわる方法論の問題に属し、意味（主観的意味連関）と機能（外在的意味連関）、社会唯名論と社会実在論、主意主義と決定論、行為中心主義と構造中心主義、意味の形成・創造と意味規則の構造などは、社会現象を基本的にどう認識するか、認識の焦点をいかに合わせるかという基礎的な存在論の問題に属し、批判的認識と価値中立的認識、主観的真理（相対主義）と客観的真理、個性記述的科学と法則定立的科学などは、認識成果である知識が現実中存在するに際して示す特性、すなわち存在様式の問題に属する。この区分なしに認識論的問題を適切に議論することは困難なのである。

この点を明らかにするために、最近刊行された今枝法之『ギデンスと社会理論』を取り上げよう¹⁾。今枝は現代イギリスの代表的社会学者の1人であるアンソニー・ギデンスの社会理論を検討しつつ、主観主義と客観主義の統合の道を探っているのだが、各々の対立項目の意味内容の区分と、それらの全体的関連を明確にできていないため議論に混乱が生じてしまい、その目的を首尾よく達成できずに終わっていると判断されるからである。

まず、『ギデンスと社会理論』の概要を紹介しておこう²⁾。それは2部に区分されていて、第1部ではギデンスの構造化理論の概要が取り上げられ、第2部は認識論的問題の議論に充てられている。ギデンスはきわめて多作であり、構造化理論という名称をもつ理論内容と、その関連で展開される現代社会分析はきわめて豊富な内容をもっているが、第1部では彼の理論の骨子が、それに対するJ. トンプソンやE. O. ライトらのギデンス批判とともに紹介され、第2部では、彼の主観主義批判と実証主義批判を手がかりに、

1) 今枝法之『ギデンスと社会理論』1990年、日本経済評論社。今枝氏は松山大学助教授（本文では敬称略）。

2) 本書の書評を筆者は『ソシオロジ』第111号、1991年5月に発表した。本稿は紙幅の都合で書評ではほとんど議論できなかった認識論的問題を取り上げている。

A. シュッツやH. ガーフィンケルやJ. アレグザンダーの理論を検討しつつ、今枝自身の認識論的見解が提示される。そして、そこに一貫しているのは主観主義と客観主義の対立の止揚であり統合への指向性である。

彼は序章においてまず、主観主義と客観主義の対立として、行為中心主義と構造中心主義の対立を指摘する³⁾。行為と構造という社会学の基礎概念の2つの中心を、どのように適切に総合的に把握しうるかは、社会学における理論的な中心問題であり続けてきた。そしてギデنزは構造化理論においてその統合の道筋を示したのも事実だ。しかし、今枝はこの問題を主観主義と客観主義の全体像の中に位置づける作業を、たんに対照表に整理するというレベルでしか遂行していない⁴⁾。したがって、行為中心主義、主意主義と構造中心主義、決定論のそれぞれが、どういう意味で主観主義であり客観主義であるのかが、十分に明らかにされないままに終わっている。前述の3つのカテゴリーの区分が彼には欠落しているため、主観主義と客観主義の全体的構成の中に、行為中心主義や構造中心主義を位置づけることができていないのである。

第2部の認識論的問題の議論には3つの論文が充てられているが、まず第1論文から検討しよう⁵⁾。彼は客観主義批判、実証主義批判の代表例としてシュッツの日常的知識、常識、世俗概念を重視する理解論を紹介することから始める。客観主義、実証主義とはその場合、専門的研究者によって価値観や概念図式が認識対象へ押し付けられる方法的態度とされ、それに対して、主観主義は認識対象である社会現象を構成している主体が意味しているところを内在的に認識する方法とされる。内在的認識方法とは、具体的には対象となる主体の理解可能な概念を使用して、対象を記述するということになる。しかし、ここに2つの問題が生じる。

3) 主としてP. ブルデューが例として示されている。今枝、前掲書、10—12頁。

4) 同上書、20頁。

5) 「「適合性の公準」と「二重の解釈学」——社会学の脱実証主義的自己理解に向けての一試論」

第1の問題は、前述の行為中心主義と構造中心主義が、必ずしも内在的認識と外在的認識に対応しないことが見逃されていることである。認識対象となる社会現象を構成する行為主体の意味するところを理解するという点では、行為中心主義は内在的理解と対応するが、行為をその条件と帰結や機能の観点から分析する外在的認識もありうるし、構造概念もその設定次第では内在的理解の対象となることは、後述する解釈学的立場が鮮明に示しているところだからである。さらに内在的理解といっても、実際には認識主体が行為主体の意味しているところについて、なんらかの認識モデルをまさに外在的に構成するという点が見逃されており、これが第2の問題につながる。

その問題は今枝が両者の統合を、ギデنزの「2段階の解釈学」に依拠することによってはかる際に生じる。対象である主体がすでに解釈した意味内容を、専門的概念によって再把握し包括するというのが、「2段階の解釈学」の骨子である⁶⁾。

たしかにギデنزの言うように、生きられた意味を認識するためには専門的概念が使用されるのであるが、その具体的な認識方法はいかなるものなのか。それは結局シュッツもまた指摘せざるをえないように、対象についてのモデル的な認識を行い、それを対象と比較検討しながら、漸次的に接近していかざるをえないものであるほかはない。生きられる意味を認識対象として重視すべきだという議論としても、いかにそれを認識するかという議論にしても、シュッツとギデنزは実は同一なのである。相異は、専門概念は常識として理解されねば使用してはならない、という点についてだけとなるが、それは方法論の相異ではなく、認識成果の表現方法の相異であり、第3章で取り上げる知識の存在様式の問題といってよい。その点についてはギデنزの言うようにシュッツは批判に値するが、対象である行為主体の意味づけの重視という点では、対象選択における力点の置き方や、認識方法について両者は大差ないのである。

6) Giddens, A., *New Rules of Sociological Method*, 1976, Hutchinson.

以上のように、今枝の議論においては、認識過程の異なった局面を区分して把握するという観点が欠落しているため、いくつかの論点が混同されている。認識対象の選択の問題という基礎的存在論の問題、社会現象をいかに認識するかという方法論の問題、そして獲得された認識成果の存在様式についての問題が、明確に区別されないまま、主観主義と客観主義の対立とその止揚が論じられている。そして、同様の原因に由来する混乱は、今枝がエスノメソドロジーを議論する際にも顕在化する。

第2部の2番目の論文において⁷⁾、エスノメソドロジーが主観主義か間主観主義かという議論を取り上げ、今枝は後者の立場を正しいと判定するのだが、その論拠はエスノメソドロジーが意味規則の構造を認識対象とするからというものである。すなわち、主観主義においては認識対象の選択は、個々の主体の意味形成に力点が置かれるが、エスノメソドロジーでは主体の意味解釈を拘束する構造的条件としての意味規則の構造にそれが置かれるというわけである。そして、意味規則の構造は主観的意味の客観的構造ということになるため、間主観主義において主観主義と客観主義が統合される地点が見いだされる。この点において、構造中心主義は客観主義と間主観主義の2つに関連づけられるため、この関連づけをさらに深く追究すれば、構造概念が問い直される契機となったと思われるが、今枝はそうしていない。彼には3つのカテゴリー区分が欠落しているため、この問題を基礎的存在論として展開する方向が開けないからである。したがって意味規則、規範、資源の3次元で構成されるギデنزの構造概念についても、その意義が十分に把握できないことになる⁸⁾。

さらに、意味規則の構造の認識方法として解釈学的立場が紹介されるが、認識の方法論としてそれがもつ意味内容は議論されていない。そこでは基礎的存在論の課題と方法論の課題が未分化のままにおかれている。つまり、ど

7) 「社会学の認識論——ギデنزのエスノメソドロジー解釈を素材として」

8) この点は注2の拙稿でも述べておいたが、ギデنزの構造化理論を理解する際に基本となるものである。

う認識するかという方法論のレベルでいえば、主観主義も間主観主義も実際には、認識主体が自己を条件づける意味規則構造（文脈）と行為主体のそれを同時に視野に収めつつ、両者を理解していくという認識過程については差異はないのであるが、その点の検討が不十分なまま、解釈学における主観主義と客観主義の統合が議論されている。

今枝がアレグザンダーの実証主義批判を検討した第2部の第3論文では⁹⁾、さらに別の混乱が現れる。アレグザンダーの主張は一言で言えば理論の復権だ。認識における理論の独自の位置が強調されるのである。それはそれなりに正しいが、今枝はそれだけでは実証主義批判として不十分と判定する。なぜなら、それは実証主義の要素である「現象主義」や「事実と価値の二元論」を批判するにすぎず、他の要素である「統一科学」の思想や「科学の進歩史観」を批判できないからというのである。そして、ギデنزの2段階の「解釈学」において示されていた、法則的知識の日常への還流による法則変化という点、すなわち、法則的知識を人々が認識することによってその法則を変化させてしまうという知識の存在様式の1つを今枝は取り上げ、それが「統一科学」の思想や「科学の進歩史観」を批判する論拠になるとする。ここに見られる混乱は、知識の存在様式の議論によって方法論の議論を処理しようとする、知識の存在様式の1つだけを指摘することによって「統一科学」の思想や「科学の進歩史観」に示される自然科学主義を克服しようとしていることから生じている。この問題は第3章でさらに検討を加えることにしよう。

最後に今枝は、実証主義批判のはてに、実証的であることを推奨する¹⁰⁾。対象からかけはなれた認識とはならないように、ある程度は対象から引き出されるデータと対照してソフトな意味で実証的であることを、脱実証主義の道として指し示すのである。実証主義と実証的であることの弁別は重要な指摘だ。しかし、それは社会学者が実行してきたことにすぎないのではないか。

9) 「社会学的実証主義の問題点」

10) 今枝、前掲書、206—207頁

実証主義が社会学史において、言われるほどに影響力を発揮してきたわけでもない。実証主義批判が強調されるのは事実だが、それは論者の強調点を際立たせるレトリックであることが多いので、一般化して社会学史的事実として鵜呑みにはできない¹¹⁾。そのような実証主義批判を前提にして、実証的であることを脱実証主義の方向として推奨することは奇妙である。また、どうせ言語ゲームにすぎないのだから実証的に対象を認識していこう¹²⁾、というのは方法論として間違いではないが、問題はその先にあるのではないか。そのような立場では、なぜ今枝がギデنزによる構造機能主義理論の批判を支持するかについての論拠が失われよう。構造機能主義もまた独立したまとまりのある言語ゲームの産物だからである。したがって、いかに適切な理論を構成するか、理論相互の媒介、統合の道をいかに切り開くか、という重要な問題は残されてしまう。

前述のように、主観主義と客観主義の上記の各対立項目は、認識の方法にかかわるもの（方法論）、認識の前提にある基本的な社会イメージにかかわるもの（基礎的存在論）、および認識成果（知識）の存在様式にかかわるものに大別できる。認識対象の選択における力点の置き方と、認識対象の構成の概略を示すのが基礎的存在論であり、その認識対象からいかにデータを収集して分析するかというのが方法論である。そして、認識成果の特性についての認識論的問題も重要だ。今枝の議論は、以上で述べてきたように、これら3つのカテゴリーが明確に自覚されていないため、混乱せざるをえなかったものであり、また、各カテゴリー内部の諸問題も十分に検討することができなかったのである。後の2つの章で、それらの混乱を解消し問題を解決する方向をさらに明確にしよう。

11) ギデنزの場合も構造機能主義批判という当時の文脈を前提にしている。

12) 今枝、前掲書、206—207頁と終章の主張を合わせればそうなる。

2 方法論と基礎的存在論

今枝の議論の混乱は、実証主義批判に鮮明に表れていることを指摘したが、それでは実証主義の問題の適切な処理とはどのようなものであろうか。この章では、まず方法論の問題に明快な解決を与えることから始めよう。方法論としての実証主義を検討することが、主観主義と客観主義の対立を止揚する第1段階である。ここで方法論というのは、前章でも述べたように、いかなる視点で認識対象を把握するかという基礎的存在論や、認識成果の存在様式についての議論などから区別されるもので、認識対象に認識がいかに接近していくかという局面に限定された認識論の部分である¹³⁾。もちろん実証主義は、基礎的存在論や認識成果の存在様式論にあたる部分も含んではいるが、中核にあるのはここで限定的に使用する方法論とよばれるべき部分なのである。その方法論が、基礎的存在論や存在様式論のありかたを規定しているといえることができる。

前章の最後でもふれたが社会学において、実証主義の神話とでもいうべきものが存在する。実証主義が社会理論の歴史において主流をなし、猛威を奮ってきたというイメージである。今枝はそれを前提にしているし、彼が議論の材料としているギデنزもその種のことを述べている。しかし、注意すべきはどのような議論の文脈でそれが語られるかということである。そこにおいてはパーソンズの構造機能主義や分析的リアリズムが批判の対象となり、それが実証主義と関連づけられる。たしかに構造機能主義は、認識対象への外在的な図式の適用という点において、いわゆる実証主義的側面をもつかのようであるが、構造機能主義の理論内容は実のところ基礎的存在論なのだ。そして、分析的リアリズムを今枝は客観主義と呼ぶが、それは認識対象と認識モデルの関係を自覚した認識論であり、それ自体に対象の主観的意味を無

13) 方法論という言葉をやより広義に使う立場もありえようが、ここでは最狭義に使用する。

視することは含まれていない。むしろ、認識のありかたを正しく把握しているとさえ言えよう。パーソンズに対抗的に位置づけられるシュッツでさえ、類型による対象認識の議論を提示しているのであり¹⁴⁾、その点において両者は同一と判定しうるのである。認識対象への図式、すなわち認識的な対象モデルの適用ということに関しては、以下で示すように主観主義も客観主義も差異はないのであり、その対象モデルにおいて対象を構成する行為主体の意味の世界が無視されるところに、すなわち後述する基礎的存在論においてこそ、構造機能主義を客観主義、実証主義と称しうる根拠があるというべきなのである。

厳密な意味での方法論的な実証主義は実行がきわめて困難であり、またそれと同時に、典型的な実証主義批判である主観主義も、その内実を探ってみれば基本的なレベルで実証主義と同一のパターンを保有しており、この点における実証主義と主観主義の対立図式はほとんど無意味だという本稿の主張は、以下のように明確に表現できる。

実証主義とは、データ収集とデータ分析によって検証され証明された仮説のみを真理として承認する立場である。論理実証主義のように厳密な仮説の演繹・検証を主張する立場であれ、経験的実証主義のようにデータを帰納的に積み上げて命題を導出する立場であれ、この点では同一である¹⁵⁾。したがってデータが客観的に獲得できない対象や仮説は認識から排除され、認識対象は、社会現象を構成する行為の客観的な帰結や条件に限定される。実証主義は客観的意味連関、因果連関に焦点を合わせるのである。

反実証主義（実証主義批判）もまた一様ではない¹⁶⁾。しかし、反実証主義の典型としての主観主義は、認識対象の意味理解、すなわち、行為主体が意

14) 今枝、前掲書、158—159頁。

15) 西部邁『剥がされた仮面』1988年、文芸春秋社、169—172頁。『新学問論』1989年、講談社現代新書、40—53頁。

16) 厳密な実証主義を実践する方が、社会科学ではむしろ例外に属すだろう。本文で実証的および立場が多数派を占める。

味しているところを理解することの重要性を強調する。経験的にデータが獲得しにくい意味の世界を対象とする立場は、たしかに実証主義に反するのであるが、それは認識対象の選択を指示する基礎的存在論のカテゴリーにおいてであり、その対象理解において、方法的に直観、内観、洞察などが強調される点についてはそれがどのような意味で反実証主義なのか検討されねばならない。この点では主観主義は、たしかに一見したところ実証主義とは対立するが本当にそうなのだろうか。

両者の方法は全く異なっているわけではない。データ収集・分析や対象選択の強調点に、換言すれば基礎的存在論に差異があるだけで、認識の方法としては基本的レベルにおいて同一である。すなわち、いかなる認識においても、対象についての一種の認識的モデルを形成し、それを対象と比較検討しつつ、よりよいモデルの形成を目指すからである。これこそ今枝が言うところの実証的態度である。認識対象とは全く無関係にモデルをたてることは不可能であり、多少とも実証的に対象とモデルは比較検討され、モデルが修正されるという認識過程は同一であることが強調されねばならない。そして、社会理論の歴史において、社会学者や社会学者が実際に遂行してきたのは、この実証的な作業にはかならないのである。それは前章でも述べたように、今枝が推奨する脱実証的なあるべき方向というほどのものではなく、過去においても現在においても実際の認識作業が遂行していることなのである。

実際の社会学的な認識は実証的に、すなわち、対象についてのモデルの設定、データとの突き合わせによるモデルの適合性の検討、モデルの対象への漸次的接近という過程で行われてきたとすれば、この認識過程は主観主義的な意味理解でも同様である。方法論的には、いかなる認識も実証的であらざるをえないのだ。いかに直感、内観、洞察をいおうとも、それは前提的な認識と対象からのデータが組み合わされて、以上のような過程を経ているのである。認識の課題は「対象についていかに適切な認識モデルを構成するか」につきる。そして、そのモデル形成においては、全くの白紙状態が前提にさ

れることはありえず、必ず何らかの前提的認識が作用している。個々の具体的な部分的な社会現象ではなく、全体的な社会現象についての一般的な前提的認識を、本稿は基礎的存在論とよぶのである。

主観主義と客観主義の対立項目である、社会唯名論と社会実在論、主意主義と決定論、行為中心主義と構造中心主義などは、認識の対象となる社会現象についての基本的な認識視点、社会イメージ、基本的枠組にかかわる区分である。すなわち基礎的存在論の問題である。基礎的存在論こそ、認識のありかたを基本的に指示するものにほかならない。

社会を、それを構成する諸個人の行為や意味を中心にイメージするのか、それとも行為の条件となる構造を中心にイメージするかは、重要な対立視点であるが、それは単純にすぎる論点であり、その克服は比較的単純である。前章で述べたように、たとえばギデنزの構造化理論も、基本的な論点においてはそうだ。しかし、行為と構造を媒介的、統合的に取り上げるといっても、それだけでは無意味であり、行為や構造をどのように設定するか、行為や構造以外の関連概念をどのように設定するか、が問われねばならないのである。ギデنزもその問題に答えようとして、多くの著作を刊行してきた¹⁷⁾。基礎的存在論は、対象である社会現象の認識の成果として成立するが、同時に認識の前提として作用する。社会学における一般理論とよばれるものの多くは、基礎的存在論なのであり、そこではこの問題に答えねばならないのである¹⁸⁾。

行為概念における主観主義と客観主義の統合についてはどうか。行為中心主義を主観主義と言い切れないのは、行為をたとえばその帰結や機能という観点から認識する立場がありうるからである。行為の主体の生きられる意味

17) その一応の決算の書が、Giddens, *The Constitution of Society*, 1984, Polity Press.

18) 社会学の一般理論に関する論文の多くが、この本来的な問題にまで到達せぬ場所、たとえば「行為か構造か」というような所で低迷しているのが現状ではないだろうか。

も、その行為の条件や帰結とともに認識の対象とならねばならない。それを可能にする基礎的存在論でなければならない。意味づけする主体としての行為主体論、行為における意味規則、規範、資源の活用を把握した行為論、それに基づいて構築される相互行為論（社会過程論）が必要とされる。

構造概念における主観主義と客観主義の統合についてはどうか。意味規則の構造は、客観的とも主観的ともいえる。構造は客観的だが、意味規則の構造は主観的な意味の客観的な存在だからである。この点においては、ギデنزの言うように、規則と資源の両者が構造の構成要素とみるべきであろう。前章でも指摘したように、今枝が客観的な意味規則構造を対象に選択する間主観主義に、主観主義と客観主義の統合の場を求めるのは¹⁹⁾、このような基礎的存在論の1つの局面においてのみ言いうることなのである。

行為と構造の両者を包括する基礎概念の体系は、たとえばギデنزの構造化理論に見られるように構築されるが、基礎的存在論はそれだけではない。対象の体系もまた基礎的存在論である。主体、場、問題、行為の4つを基本要素とする対象の体系をいかに構築するか、が問われるのである。というのも、行為、相互行為、構造、変動を中心とする基礎概念の体系は、いかなる社会現象にも適用可能な形式で構築されるが、社会現象の体系もまた基礎的存在論として、社会学の認識において基本的な重要性をもっているからである。

この対象の体系については、すでに拙稿で示したこともあるので²⁰⁾、ここでは簡単に述べるに止どめよう。すなわち、さまざまな場において、さまざまな主体が、さまざまな問題に直面して、その解決を目指してさまざまに行為する、といった基本的な構成を、主体の種類、場の種類、問題の種類、行為の種類を枚挙しつつ、それらに対応して設定していくと、社会学が対象とするあらゆる社会現象を包括しうるのであり、固有の主体、問題、行為を含んだ無数の場の複合的な全体として、社会のイメージが構築されるのである。

19) 今枝、前掲書、第5章「社会学の認識論」

20) 拙稿「社会学の理論体系」『桃山学院大学社会学論集』第23巻第1号、1989年。

基礎的存在論こそ、社会学における基礎理論であり、本当の意味での社会学原理である。それは現在の時点では、唯一のものがあるわけではなく、完全な統合も可能であるわけではない。多様な基礎的存在論が成立しうる。それらを成立せしめているものが、さまざまな視点である。視点にはすでに拙稿で示したように²¹⁾、①古典的社会学者の固有の視点、②～主義、～論というかたちで示される方法的な立場、③中心となる概念、④現実の論理的構成などが存在する。それらに基づいて概念の体系と対象の体系が構築される。各視点は、それぞれの概念の内容とそれらの全体的連関、対象の基本的要素の分類とそれらの全体的連関のありかたを規定するものである。社会学の認識作業はこれを精練しなければならない。これこそが社会学原論とよばれるべきものでもある。

パーソンズの構造機能主義やギデンズの構造化理論は、②に属する視点に基づいて構築された原論であり、その他多数のその種の原論と、マルクスやヴェーバーやデュルケム以来蓄積された①に属する視点に基づいて構築された原論とが、いわゆる社会学理論とよばれるものの大多数を占めている。しかし、それらはそれぞれにおいても完成状態にあるわけではなく、また、それぞれは多くの場合併存状態に止どまっているのが、社会学の現在の段階における姿である。そして、それに加えて③や④の視点に基づくものもあり、④は現在のところ少数であるが²²⁾、③は多くの概念について成立しうる。

たとえば、中心となる概念の1つに役割概念がある。社会学とは何かに答えようとするとき、社会科学の社会学以外の個別科学との差異を明示しようとするとき、役割こそが社会学の基礎的にして中心的な概念とされることがある²³⁾。政治学は権力、経済学は貨幣、社会学は役割という具合にである。

21) 同上論文

22) その1例が筆者も参加している森下・君塚・宮本『パラドックスの社会学』1989年、新曜社。

23) 西部、前掲書でもそう述べられている。間違いではないが、あくまで1つの基礎的存在論にすぎない。

それはパーソンズの図式に由来している。行為体系の中の社会体系の中の社会的共同体は、狭義の社会学の対象であり、それは役割の体系として存立する。そして、役割が他者との関係においてとるべき行為のありかたであるとすれば、役割の体系は規範の体系でもある。他者との関係において「～すべき」だとか「～すべきでない」という形式で表現される意味規則こそ、規範とよばれるものにほかならないからである。

役割は規範的側面だけをもつにすぎないのではない。機能的側面と意味表現的側面をももつ。これは、役割概念を中心概念として構築される基礎的存在論が、主観主義と客観主義を統合したものでありうることを示している。行為の帰結が社会において織り成す連関が、社会の機能的な側面であり、行為主体の主観的な意味の表現が織り成す連関が、社会の意味表現的な側面である。このような役割に基づいて行為が遂行され、相互行為が展開され、役割構造が生産され再生産される。また、主体はさまざまな場において、何らかの役割を付与された主体であり、その役割に課せられた問題を解決しようとして行為する。以上のように、役割概念を中心としても、主観主義と客観主義を統合しつつ、概念の体系と対象の体系を構築していくことが可能なのである。

いかなる視点を採用しても、基礎的存在論であることを目指すのであれば、社会現象の基本的構成要素をしめす基礎概念、すなわち行為主体、行為、相互行為、構造、変動などの各々と、それらの関連枠組について明確な表現を与えねばなるまい。また、対象の体系についても同じ課題を与えられる。さらに、それらは相互に包括しあう努力を重ねねばならないだろう。社会学が社会学の1つの個別科学として自己の存在を確固たるものにしようとするのなら、その課題への自覚と努力を欠かすことはできない。社会学における認識論的問題は、社会学的認識を基礎づけるこの基礎的存在論を構築する課題を含まざるをえないのである。

3 知識の存在様式

本稿が主張してきたように認識論的問題は方法論、基礎的存在論だけではない。認識成果、すなわち知識の存在様式も認識論的問題として議論されるに値する。そして、これら3つのカテゴリーはこれまで述べてきたように、明確に区別された上で論じられる必要がある。すでに第1章で、今枝が実証主義批判の一環として、実証主義の「統一科学」の思想や「科学の進歩史観」を批判する際に²⁴⁾、専門的知識としての法則的知識が日常世界に繰り込まれることに起因して、行為主体がその知識を行為の手段として利用することによって法則が破られることがあるという、いわゆる予言の自己破壊を論証に使用していることの問題点を指摘しておいた。すなわち、その論証の方法はカテゴリーの区別を無視していること、および、存在様式にかかわる論点の多様性を無視していることが問題なのであった。本章でそれをさらに詳細に論じよう。

「統一科学」の思想は、自然科学の方法である実証主義を唯一の科学的方法として、社会科学にもそれを導入しようとする立場であり、「科学の進歩史観」も同様に、より進化した科学である自然科学的形態を、社会科学であろうとする限りは採用せざるをえないと考える。客観的データが獲得しうる現象のみを認識対象とするその立場は、社会科学の方法としては狭すぎる。それに限定されるならば、認識対象は著しく狭められよう。しかし、この立場を批判することは正しいが、第2章で述べたような方法論と基礎的存在論というカテゴリーにおいて遂行されるべき議論なのである。予言の自己破壊は、知識の存在様式の問題であることに注意すべきだ。

予言の自己破壊が知識の存在様式についての議論であることから、「統一科学」の思想と「科学の進歩史観」が賞揚する自然科学の存在様式、すなわち命題の体系的蓄積性にたいする批判としてそれは有効性を持つ。しかし、

24) 今枝、前掲書、第6章「社会学的実証主義の問題点」

その有効性はきわめて限定されたものにすぎない。というのは、法則的知識の体系的蓄積の可能性を信じる立場への批判としては予言の自己破壊の指摘は、体系的知識の蓄積の困難性の一端を指摘するにとどまるからである。体系的知識の蓄積の困難性を示すためには、「一般的、客観的な真理は成立するか」という問題に焦点を合わせて、社会学的ないし社会科学的知識の存在様式を解明しなければならない。そして、その際にまず第1に取り上げるべきは予言の自己破壊ではなく、対象の複雑な全体性と認識の部分性についての議論であるべきなのだ。

認識対象の複雑性に完全に対応した認識は不可能であることが、認識の基本的前提とされる必要がある。認識されない要素を対象は含む。そのため知識を越えた部分が残る、その知識に基づく予測は外れることがあるし、その知識に基づいて決定された行為は、意図せざる帰結をもたらすことになる。予言の自己破壊はその特殊形態にすぎない。もちろん、これは社会理論に限ったことではない。自然科学もそうである。だからこそ両者とも、対象についての認識モデルを漸進的に作成する過程を必須不可欠なものとする。成立する真理は程度の差はあれ相対的なものであって、客観的真理は絶対的には成立しえない。

第2に、基礎的存在論はともかく、具体的な個々の認識成果は、現象についての個性的な記述であり、個々の現象の個性の差異、あるいは時間的推移による変化は、一般的命題（法則）定立を困難にする点が重要である。自然科学の対象は社会現象に比べて個性の差異の程度が低いので、自然科学においてはこの困難さは少ないが、社会現象は一見類似した現象でも複雑な要因の関連によってその独自性を示すし、対象自体が歴史的に変化するので、社会科学は一般化の努力を捨てることはできないにしても、それを自然科学のように唯一の方向とするわけではないのである。

第3に、認識主体のもつ前提的認識に潜む価値判断が認識に及ぼす影響についてであるが、それは自然科学においてすら認められるものであり、社会

理論においては比較にならぬほどそれが大きいことである。それについて自覚的か否かにかかわらず、その価値判断は認識に作用するので、知識は価値中立的ではありえない。そして、その価値判断には無意識的条件も加担していることに注意すべきである。

以上のように、知識の存在様式からもたらされる諸特性から、客観的真理が成立する根拠はきわめて不安定なのである。それでも知識は、客観的真理であるかのように、ある時代、ある社会では流通しうる。それは知識の社会的評価の問題である。その場合、実証的な価値は絶対的ではありえない。多少ともすべての知識は実証的に獲得されているからだ。むしろ社会的評価において重要なのは、知識と社会的コンテクストとの対応性である²⁵⁾。その時点において社会が必要としている知識であれば、それは真理として流通しうるのである。ただし、それがすでに常識となっている知識に全面的に帰属するというのではなく、コンテクストの可能性に呼応するという意味でもある。社会が必要としているというのは、たんに社会の多数の構成員や、あるいは権力主体が現実にと要請しているということにとどまらず、社会が潜在的に秘めている可能性に呼応していることをも含むのである²⁶⁾。たとえば、マルクス主義はそのようにして真理として通用し、世界を動かしてきたのではなかったか。

絶対的な客観的真理は成立しえず、たんに相対的な客観的真理、相対的に主観的な真理しかありえないとすれば、相対主義を甘受せざるをえないのか。所詮すべての知識は言語ゲームだと考えて、相対主義に安住することは知的怠惰にすぎない。前述の3点において指摘しておいたように、それらを克服する道を歩む必要がある。第1に、現象の複雑性に対応したモデルの形成、第2に、一般化の努力、そして第3に、前提的認識への反省である。いずれの道においても相対主義への安住の誘惑が強い。第1や第2の道は非常に困

25) この点については佐和隆光「夢と禁欲」浅田ほか『科学的方法とは何か』1986年、中公新書。

26) 予言の自己成就や自己破壊との関連でもこの点は重要である。

難な認識作業であるし、第3の道にはまた、次のような別の困難もある。

いかなる認識も前提的認識（基礎的存在論，価値判断）に作用されているので，それに反省的に対処することが必要である。反省なき認識成果が真理を主張するとイデオロギーに堕する。しかし，いかなる認識も多少ともイデオロギー的である。ここから自覚的にイデオロギー的な認識を遂行するという立場も成立しうる。そしてこの点において注意すべきは，それが先験的に体制批判的であるべきだ，と言えないことである。それは選択の問題にすぎない。価値中立的でありえないのは当然だが，現実批判的といっても1つの立場があるわけではない。重要なのは問題発見的，解決志向的，可能性発見的という視点であり，それが批判的であることにほかならない。体制批判のみが批判的というのではナイーブに過ぎよう²⁷⁾。しかも，知識は現実存在することによって，それは多様に機能しうるものである。すなわち，知識の内容とその現実的機能には必然的な関係はない。

さて，相対主義の克服を目指す際に，もう1つの大きな課題に直面する。媒介と統合の課題である。多様な視点は，したがってまた認識成果は，相対主義的な並列，対抗状態におかれている。それが放置されたままでいいわけではない。それぞれがよりよい知識へと接近する努力を重ねるとともに，それぞれの知識は相互に批判しあい包括しあう努力，あるいは，相互の関係を明確化し全体を見通す中で自らの相対的な位置を確定する努力を重ねる必要がある。第2章で示したように基礎的存在論もまた，その課題を課せられていた。しかし，それは社会学理論の内部だけではすまない。専門的知識と日常的知識の関係，自然科学と社会科学との関係，人文科学やジャーナリズムと社会科学の関係，社会科学内部の個別科学と社会学の関係においても，この課題に直面している。専門的知識と日常的知識の関係については第1章で言及したので，ここでは以下に1つの事例を取り上げて，後の3つについて若干議論しておこう。

27) マルクス主義の影響を強く残した批判理論は，この点において危うい。

1987年から88年にかけて起こった東大教養学部中沢人事問題において²⁸⁾、社会学と社会科学のありかたが問い直される契機が生じたが、そこでの問題提起は社会学界で正面から受け止められることなく、ジャーナリズムが情報提供を止めるとともに関心が急速に低下してしまった²⁹⁾。しかし、その問題には社会学的に重要な含意が見いだされる。たとえば、社会学や社会科学のありかた以外にも、左翼イデオロギーの機能、研究・教育・組織運営と社会学者の関連などを再検討するのに適切な材料が出揃っていたのであった。本格的な検討は別稿を期し、ここでは本稿のテーマとの関連でのみ言及することに止めたい。

一部の自然科学者たちは、中沢新一の提示する知識の存在様式を問題にした。1つには、それがレトリックのみであり、しかも自然科学的概念を誤った意味でメタファーとしてそこに使っているという問題であり、もう1つは、それがジャーナリスティックでありアカデミックではないという問題であった³⁰⁾。彼らは中沢的知識が、実証主義的方法によって獲得されたものではなく、法則的知識として成立していないことを批判した。それは現実的有効性をもたない知識だと彼らは主張したのである³¹⁾。

自然科学者たちの認識成果がどれほどの現実的有効性をもつのか、そして、有効性などというものがいかに知識の存在様式に左右されるか、についての彼らのあまりにも素朴な態度には驚くべきものがある。また、自然科学的概念、たとえばフラクタル概念についても、複数の理解が成立する現状におい

28) 東京外大助手中沢新一氏を東大教養学部採用する人事案が、1988年3月の教授会で大差で否決された事にかかわる問題。

29) たとえば『朝日ジャーナル』は1988年4月から7月にかけて、この問題に関する記事や論稿をいくつか掲載したが、それ以降は取り上げなかった。他の雑誌もほぼ同様であった。

30) アカデミズムとジャーナリズムとの関係については、杉山光信『学問とジャーナリズムの間』1989年、みすず書房。

31) 杉本大一郎「レトリックではなく、学問の有効性で勝負しよう」『朝日ジャーナル』1988年6月3日号。小出昭一郎「ひとりよがりの言葉の遊戯は「知の地殻変動」に対処できるか」『朝日ジャーナル』1988年7月1日号。

て自分達の理解が唯一正しいと信じていることも³²⁾、真理に一步一步接近しようとするべき科学者の態度としてあってはならないものだ。もっとも、当時の東大教養学部には、ともかくも中沢人事とそれを推進していた学者グループを攻撃しようという価値判断が優先しており、たとえどんなことでも攻撃材料になるものなら何でも使ったとも判断されるので、自然科学者たちが本気でそう信じていたかどうかは定かではないところがあるが、彼らはそう信じているかのように振る舞ったのであった。中沢の著作の内容を対象とした認識としては、実証主義どころか、認識主体である自然科学者自らの主観に依拠するという意味で、それこそきわめて「主観主義」的なものに終始したのである³³⁾。

中沢に批判的だったのは自然科学者だけではない。社会学者であると自他ともに認める人々にも批判者はいた。中沢的知識は科学的検証に耐ええない知識である、ジャーナリスティックにすぎて学問とは言えない、などという批判がみられた。これも自然科学者の場合と同様に、組織内の政治的状况に条件づけられていると思われるふしもあるので、文字どおりに受け取り難いところがあるが、ともあれ彼らはそのように表現したのであった。本来は、中沢が対象としている現象について、中沢が形成している認識モデルのどこに難点があるかが、丁寧に議論されるべきところで、たんに方法論における実証主義的信念を持ち出したり、表現の形式における非アカデミズム性を云々したりということしかできなかったのである³⁴⁾。

社会学とよばれる知識は、現在どのように存在しているのか。中沢が東大教養学部の社会学教室に配属される予定となったことから、社会学者と自他ともに認める人々の中には、中沢には社会学という知識を教育することはできないという判断が生じた。しかし、社会学はそれほど強く主張されるほど

32) 森毅「駒場村の西部劇を喰う」『文芸春秋』1988年7月号。

33) 自己の前提的認識に無反省な態度こそ「主観主義」と称されるべきかもしれない。

34) 折原浩「学問の基本姿勢と大学教育の課題」『朝日ジャーナル』1988年4月29日号。

の確固たる知識として存在しえているであろうか。第2章で示したように、多様な視点があり、各々の視点に基づいて知識体系は成立する。たとえマックス・ヴェーバーのものであろうとも、それは古典的学者の個性的な固有の視点と、それに基づく限りでの知識体系にすぎない。それが唯一絶対の社会学的知識の存在様式ではないし、ヴェーバー解釈自体も多様に展開されてきている。また、社会学教育において、それを担当している日本の社会学者たちが伝達している知識内容が、実に多種多様であることが考えられるべきだ。中沢を排除するに足るほどの、他の社会科学から画然と区別されうる基礎的存在論が構築されていない、社会学の現状をこそ社会学者は自覚し、その構築に努力すべきなのである。

知識の存在様式として、知識はいかなる表現様式を取っているかは基本的問題である。社会学あるいは社会科学でしばしば見られるのは、表現に用いる言葉に逆に制約されて、貧弱な知識しか獲得できない事態である。もっともらしいアカデミックな表現が、貧寒な知識内容を紛飾するために駆使されることも多いことを、自戒を込めて言っておかねばならない。ジャーナリストティックな表現と、鮮やかなレトリックを駆使した表現とは必ずしも一致しはしないが、いずれにしてもその認識内容が問題なのであって、表現様式によって知識全体を裁断することはできない。しかし、中沢に下された評価はまさにその種のものであった。この点においても、社会学的知識の発展のために必要な統合の課題が無視されたのであった。

お わ り に

本稿の目的は、社会学における認識論的問題の全体的な構図を描くことであり、それらを議論する際に向かうべき方向を示すことであった。その目的は以下のように、ほぼ達成されたと思われる。

第1に、認識論的問題が大きく3つのカテゴリー、すなわち方法論、基礎的存在論、存在様式論に区分されること、そしてそれらを区分することによ

って議論の混乱が解消されることを、いくつかの例において示すことができた。

第2に、方法論において、主観主義と客観主義を適切に統合しうる地点があること、その地点に立てば方法論における無意味な対立が解消され、認識本来の目標である「対象についてのより適切な認識モデルの形成」が鮮明に浮上してくることを示すことができた。

第3に、基礎的存在論が社会学的認識の基盤として自覚的に構築されるべきこと、そこにおいて主観主義と客観主義の統合がなされるが、それは社会学原論の体系的構築を遂行する方向でなされるべきことを示すことができた。

第4に、認識成果の存在様式をめぐる議論の多様な論点を、明確に整理して示すこと、および、相対主義克服の道筋を示すことができた。

社会学における認識論的問題を議論する際に、筆者が採用する全体的な見取り図とスタイルは、本稿でほぼ確立しえた。これが筆者の固有の狭い立場でないことを、今後さまざまな場、さまざまな問題において証明していくことが残された課題となろう。

Epistemological Problems in Sociology : Arrangement & Examination

Kouji Miyamoto

Epistemological problems in sociology have been discussed, but they remain in confusion. This paper tries to arrange epistemological problems and show a clear-cut construction of them. Conclusions are as follows.

First, there are three categories into which epistemological problems are classified. They are methodology, basic ontology, and modes of knowledge. By such a classification, we can find a proper way to discuss epistemological problems.

Second, subjectivism and objectivism are integrated in methodology. Thus, we can say that the opposition between antipositivism and positivism is meaningless.

Third, subjectivism and objectivism are integrated in basic ontology. Then, we can construct basic ontology which integrates action-centrism and structure-centrism.

Fourth, various points at issues, with which we are faced when we discuss modes of knowledge, are arranged in a clear cut way. Thereby, we can properly deal with relativism.